



インスタントえっち☆ トイレの花子さん編
サンプル

いば神円(しんえん)

日々、えつちな遊びに誘われるだけの話。解決とかは無いです。

主人公・貴女

基本は、おかつぱ黒髪、白いシャツ赤いサロペットスカートの花子さん。相手の好みの体形になる。

お相手1・ニノミヤ

本とか読む勤勉な石造の存在が実体化して遊びにくる。

一人称・僕

お相手2・人体君

人体模型君がデートのお誘いにくる。

一人称・僕

お相手3・金魚君

何故か初恋の先生の面影を貴女にみて通う男子学生。

一人称・俺

お相手4・その他、大勢の男子学生

モブが色々遊びにくる。

★ハート喘ぎ

★逆ハーレム

★複数

★二穴責め

★学校

★オカルト・妖怪

男子校に通う者達の熱意で具現化してしまった貴女は日々、遊びましよう誘われるよ。

貴女が産まれたのは何時の頃だったか。遠くから聴こえる声達に眠い瞼が、ゆっくりと開いて目の前を見る。

天井。

ふわふわ、ふわり。

汚れる要素は少ないが、そんなに掃除もされていないだろう天井から視線を動かせば身体が、くるりと回った。

窓。

個室のトイレ。

男性用の小便秘器。

靴跡がある床。

「……」

貴女は空中で回転してしまふ身体を止めて洗面所の方へと、ふよふよ向かう。

向かえば洗面所の上側に水垢や白い鱗が付いた鏡が視界に入り貴女は映らない。
「……？」

貴女は顔を傾け瞼を数回開閉し仕方なさそうに窓側を見る。窓側に近づけば中途半端な開けっ放しの窓の隙間から風が流れ貴女の黒髪を揺らした。気持ちの良い風につられて外を覗き込む。

「オーライオーライ」

「走れ走れ！」

「いっちに、いっちに！」

太陽の光に照らされて動く人の姿。彼らは学生。学校の生徒達。貴女は窓淵に座ると、ぼんやりとキラキラ輝く彼らを眺めたのだった。

じゃばばばばば〜！

夏休みに入る一週間前、学校の大掃除が行われる。その中で普段、汚れが目立つトイレが綺麗になっていく。窓淵に腰かけて掃除する少年達を眺めながら貴女は満足そうに頷いた。やはり住処は綺麗な方が気持ちが良いものだからだ。

「あつ、かけたな！」

「涼しく！」

「もう脱いでやろうぜ〜！」

ホースから水を出してトイレ全体を水洗い。その間、ジャージ姿だった少年達は各々、服を廊下側に脱ぎ捨ててギヤハギヤハと笑いながら涼しむ。

ばしやつ。

そんな中、貴女にもホースの水はかかるが少年達は一切気づいていない。濡れてしまった貴女は楽しそうな少年達の真似をして試しに普段から着ている赤いサロペットスカートを脱いでトイレの扉上にかけて白いシャツも同じくかけて赤白の運動靴、白い靴下、白いシューズまで脱いでいく。そうして窓淵に座っていた貴女はニコニコしながら、シューズも置いて、ふと視線を感じて窓外に目が向く。視線の先には勉強熱心な少年の像。視線が合うと本で、ぱつと顔を隠して少ししてズレて、ちよつと瞳が覗く。

「……」

貴女は初めて自分以外の似た存在に気が付いて嬉しくなつて手を、ぴらぴら振ると彼は本を下げ片手を振り返してくれる。

「……」

嬉しさと共に誰かと取れるコミュニケーションを、もう少し堪能しなくなつ

た貴女は浮かべる能力を使つて前に進むが二階から、そのまま下へ行こうとして最後の足先の小指が窓から出る部分で身体が、ぴたつと止まってしまった。

「？」

貴女は不思議そうに白い自分の足先を見て窓から引っぱり出そうとするが決して離れない。どうやら貴女は住処のトイレから身体全てを出し切る事は出来ないようだ。

「……」

貴女は、しゅんつとして仕方なく窓縁に腰かける状態に戻る。今度は少年像の方だけを見つめて、ぼうつと過ごしたのだった。

コンコン……。

トイレの一番奥の個室の空間に浮かびながら眠っていれば小さなノック音。瞼を開けた貴女は扉を、そっと押す。

「……? ……!」

扉を開けて現れたのは和風の服装をした少年で剣道部辺りの子かと貴女は最初思ったが、そうではなかった。本を一冊手にした身体の筋肉は整っているが、まだ成長過程中の少年。

「こんにちは花子さん」

「はなこ……」

貴女は少年に名を呼ばれ初めて自分の総称に気付く。ふわふわと浮いていた身体が気付きによって床面に足が付いた。

「僕は二ノミヤです」

「二ノミヤ……二ノ君……！」

ふと貴女は思い出す。彼とは昼間、遠くから挨拶を交わしていた。ぼんやりと存在している為か貴女は何時も曖昧な日々を送っているのだ。

「その……今日まで花子さんが、まさか男子校に存在するとは思わなくて……挨拶が遅れてしまいました」

二ノが恥ずかしそうに、そう言って貴女は不思議そうな表情になる。

「ああ……この学校の花子さんは産まれたばかりですもんね……色々、ご存知なさそう……そうですね……僕らは妖怪、怪談、都市伝説などと言われる多くの人間達の認知で存在している存在です」

貴女はコクリと頷いて自分の白い手を見る。何だか、二ノに指摘されると白い手は実体を帯びていくような気がした。

「私はハナコ……」

「そうです。産まれたたで純粋な花子さん……あ、そうだ、これをどうぞ」

二ノを見れば小さな花束を手にして貴女に差し出している。貴女は受け取って周りを見渡した。暗い暗いトイレは月明かりだけだ。

「花瓶……」

「……良ければ、これを使ってください」

細長い湯飲みを渡されて貴女は受け取り洗面台に花を飾る。ふと洗面台の上の鏡に薄ら、おかつぱ黒髪の少女のようなモノが映っているような気がした。「花子さんは、まだ僕以外に認識されていないので何時、消えてしまうかわかりません」

二ノは貴女の後ろに立って鏡越しに、そう呟くと、そつと両手を鏡に伸ばし手を付いた。彼の胸側と貴女の背中側が触れ合う。出会った時は石像で硬そうに見えたが今は、ちよつと古風な少年だ。温かさを感じる。

「……僕が、もつと花子さんを確立させましょうか」

「?」

貴女は不思議そうに鏡越しに二ノを見つめていれば貴女より少し背の高い彼は、そっと手を回して腹部に当てた。白いシャツ越しに手で温められていく。

「花子さんは可愛い可愛い……純粹で美しくて……」

二ノの息が何だか荒い。

「……っ？」

二ノが貴女のシャツ下に手を入れ込んでいく。白い腹部が出てきて、ヘソの穴が見え指先が、ツンツンと悪戯に動く。脇腹が撫でられている。

「……っう？」

最初は何も特に、どうという事は無かったのに何だか、モゾモゾしてきて貴女は少しだけ身動いだ。

「……くすぐりたい？」

二ノが貴女の耳元に囁き。貴女は、これが擦りたいという事かと思ひ顔く。

「はあ……可愛い……」

手の動きは止まらない。

むにむに……♡ さわさわ……♡

「……ん、う？ う……？」

手は貴女の白い肌を、ゆつくりと進み胸部へ。今まで意識した事の無かった胸部は、ふつくらとした乳房をつけており、二ノの手に丁度納まる大きさだ。

「……はあ♡ すごい……♡ 理想的な大きさに柔らかさ……花子さん……凄
いよ……♡」

「……んう」

「手が気持ちい……♡ 乳首、可愛い桃色だね♡ おっぱい吸って良い？ 吸っ
ちやお♡」

「あ……ふあっ♡」

二ノは貴女の脇下に頭を通すと乳房に唇を合わせ、ちゅつと音を鳴らした。その途端、不思議な感覚が身体中に広がり貴女の喉から甘い声上がる。

「か、可愛いつ♡ ううう！ 花子さん♡ 可愛いつ♡ 可愛いね♡」

二ノの様子のおかしさに貴女は戸惑うが乳首から感じる甘さが気になって止めはしない。

ちゅ♡ ちゅ、ちゅ、ちゅ♡

ぞくぞくする身体。何だか股の間が、ぬめぬめしてきた。

「はあ……♡ おっぱい吸われて感じちやつたんだ？ なんて愛らしいんだ……♡」

二ノは貴女に腰を押し付けて赤いスカートを腰使いのみで捲っていく。

「……ふう♡ う……♡ う♡」

「ああ……花子さんの、おまんこ舐めたい！ 舐めて良い？ 良いよね？」

「え、あう？」

「ありがとう！」

強引に洗面台に貴女は座らされて膝を開かれ、二ノの顔が間に入り込む。貴女の白いショーツには今まで無かった染みが出来ており、それを見た二ノは鼻を押し当てて大きく息を吸い込んだ。

「ふえ……」

びつくりした貴女は晒された状態の自分の乳房を両腕に挟み手を合わせ祈る形になる。

「最高すぎる……テケテケさんも人気だけど、これは……そうか……男子校だもんね……大人気になっちゃうんじゃないかな……ふふ……僕が最初かあ……」

そんな事を言いながら、二ノは貴女の白いショーツを引き抜き毛が一本もな

い白く、ぷっくりした割れ目に舌を合わす。

ねろねろねろ……♡ ねちゅねちゅねちゅ……♡

「ひぁ♡ あう♡ う〜♡」

「なんて美味しい、ぷにぷにまんこなんだ……！」

よくわからない感覚が貴女の内側に膨らんでいく。我慢しようとしたが出来ず。

「桃色のお豆ちゃん美味しい♡ 美味しいよお♡」

執拗な二ノの舌の動きに負けて貴女の敏感な所から透明な液体が噴き出した。

ぴしゅしゅしゅ♡

「ふあああ♡」

貴女は身体の痙攣に身を朱くして涙を滲ませている。

「はあ♡ はあ♡ はあ♡ 産まれてきてくれて、ありがとう花子さん♡ 僕は幸せだあ♡」

二ノは貴女から嘔き出した液体を、べろべろ舐め続け。貴女は敏感な、その場所への刺激に逃げ出したいような、もう一度味わいたいような不可思議な感覚に、ぽろっと涙を溢す。

「うう♡ ううう♡」

「かわつ♡ はあ♡ 花子さん♡ 我慢しなくて良いんだよ♡ 気持ちいことは良い事なんだ♡ もつと、もーつと気持ち良くなるうね♡ さあ、僕に何でも出しちゃって♡ はあ♡ はあ♡ はあ♡ はあ♡」

二ノの言葉は半分分からなかったが、これが気持ち良いという事は分かった。貴女は気持ち良さを我慢する事は止めて、二ノの執拗な舌使いに身を任せる。

「ふああん♡」

にゆるにゆる♡　ぺちよぺちよ♡　べろべろ♡　じゅるるるる♡

あまりの気持ち良さに貴女の身が仰け反り顎が上向き涙と涎が垂れていく。
「っあ……♡♡♡」

ガクンガクンと腰が揺れて、その状態で初めての尿が飛び出ていく。出る尿は、とても気持ち良く貴女は、二ノの顔や口内に出し切ってしまうのだった。

ごくんっ♡　ごくんっ♡　ごくんっ♡　ぺろり……♡

「はあ……♡　美味しかった……♡」

☆☆☆続きは本編で！

☆☆☆

っち☆～トイレの花子さん編～
サンプル

発行日 2023年6月27日

著者 いば神円(しんえん)
<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
